

第 19 話〈夏に降る霜〉の要約と参考資料

「夏の夜降る霜」の煙毒説を裏付けるのは、煙害でウルシの実の収量が落ちたので減税されたという文書です。また、日本の銀が輸出されていたこと、府内藩が西欧文明の移入に熱心だったことを考えると、ポルトガル人の娘が土呂久に来ていたこともありえました。

第 19 話〈夏に降る霜〉の参考資料

19-1 小手川善次郎遺稿集「高千穂の民家他歴史資料」より

元禄三年減租運動資料

岩戸村役場に保存されて居る古文書の内に元禄三年十二月に差し出された減租に関する訴状の控へがあつて、当時の農民生活の状況を知る為に良い資料であると思ふから写し取った。(略)

御断り申上候口上書

(略)

右の訴状に対する下文也

覚

一、岩戸村煙痛み漆木六十八本六歩此漆一ノ三百七十二匁指免候事。

(略)

元禄三庚午年十二月十七日

有馬四郎左衛門 外三名 代官宛

右之通り仰付られ候条御書付の趣百姓中へ申渡さるべく候

己上

午の十二月二十九日

代官 (在判)

川北九ヶ村庄屋中

19-2 外録銀山の煙害

山口保明「山弥時代の土呂久」より

「かねふき歌」に出てくる「床屋」とは、熔鋳の場所、または熔鋳炉自体であり、「床屋せんどさん」とは、熔鋳釜を操作する熟練工のことで、吹き大工頭である。同じく「床屋大工」もこの意であり、差し子の監督をする。「手子」は雑役夫で、フイゴを差すのを兼ねている場合が多かった。ちなみに、この雑役方には、土地の婦女子までが加わっていたと伝えられる。歌の中に「空を舞う鳥みな落てる」とあるが、佐藤ヤス氏 (明治二

十二年生、岩戸・立宿)によれば「昔から、南(土呂久)から奥へは鳥は飛ばないという伝えがあった」という。文字通りの製錬による、煙害のことである。(P20)

既に『矢津田文書』によれば、元禄三年(1690)には、土地の庄屋連名で、当時の船之尾代官所(註・日之影町七折)を通じ、「岩戸村煙痛」の訴えが延岡有馬藩に出されている。これは降煙害であるが、地残害もまたひどい。義雄氏によると、現在でも水田耕作の場合、水が深すぎると往時の鉍毒が作用して、稲はできないという。またこのことによつて、床屋の跡だったことが分かるともいう。殊に土呂久の奥の方ではそうであるし、床屋跡には茄子も胡瓜も実らないので、他所の土を入れて栽培するという。(P20)

19-3 ポルトガル人鉍山技師

藤寺非宝提供「続珍説地名考 土呂久(トロク)」(日向日新聞 1958年8月14日)

土呂久鉍山は四百年前、夢物語で有名な守田山弥が開山した鉍山といわれ金、銀、銅、鉛、スズなど全国でも含有量では有名な鉍山である。守田山弥はこの山から銀、銅を掘りだし泉州堺で外国貿易を行い巨万の富を作ったといわれる人。当時日本の冶金、採掘など鉍山技術は低く泉州堺で知り合ったポルトガル人トロフを技術者として同鉍山に招き、それから採鉍技術など急激に向上して相当の人夫がこの土地に集まり旅館、遊女屋もできて大繁盛したといわれ、今でも町という地名が残っている。トロフは船で現在の延岡市土々呂に上陸し、それから徒歩でこの山にたどりついたといわれる。その名がもじつて今日の土々呂、土呂久という地名が生まれたもの。トロフはのち徳川幕府から外人追放の命令であちこち逃げ回り、ついに祖母山の入口にあたる五ヶ所高原で部落民の手あつい看護のもとに一生を終ったが、部落民は後難をおそれてトロフの墓とはいわず“きつね塚”と呼び、今なおその塚が残っている。

山口保明「山弥時代の土呂久」(鉍脈11号)より

土呂久の地名ともなったという、ヨセフ・トルコ(トルフ)というポルトガル人の製錬指導の伝承も、地名は別として、「かねふき歌」の文句や、広く語られる五ヶ所にてのトルコ終焉説も、全国的な趨勢及び府内藩の関係する鉍山として、一考を要するであろう。ただトルコについては、または外人鉍山師の確実な記録がない現在では、何とも言えないが、天文12年(1543)ポルトガル人の種子島漂着以来、間もなく九州の諸港に、毎年来航するようになった。ポルトガル船の我が国との交易内容は、中国商品を輸入し、日本銀を搬出するといった、いわば仲介貿易が中心となっているが、このような交易の発展を考慮に入れるならば、明貿易のそれと合わせ、あながち事実無根とだけで、退けられない面を持つ。この伝承にもまた否定する材料は、何もないのである。(P20)

19-4 土呂久にヨーロッパ人が来た可能性

日本工学会編「日本工業史 鉱業編」(昭和5年8月刊、昭和43年5月復刻)

天文12年(西暦1543年)8月、葡萄牙人種子島に來航して以來、薩摩の鹿兒島及び山川港。肥前の平戸。豊後の日出に來往し、貿易を営み、傍ら耶蘇教を伝導せり。西班牙人はフィリピン諸島を占領し、天正12年(西暦1583年)6月、平戸に來航し、和蘭人は慶長5年(西暦1600年)豊後に來たれり。後、慶長12年(西暦1607年)本邦諸港に於いて臨時貿易することを允許せられたらい。慶長18年(西暦1613年)英吉利人始めて長崎に至れり。斯くの如く外人の渡來に伴ひ、貿易亦膨張し、為に輸出数量実に莫大に上れり。(天文14年<西暦1545年>より寛永元年<西暦1624年>に至る80年間、葡萄牙人に依りて輸出されたる額は6億円なりと云ふ) (P55)